

巻き戻りのウエルシュ ドラゴン

夜乃さん

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

アザゼル先生が作った装置のせいで過去によく似た異世界に行くことになったイツセー。本来の内容とは変わった世界で彼は元の世界に戻るために、再び様々な事件を解決していく。

ハーメルンでは初投稿となります。

誤字、脱字などがあるかもしれませんが、よろしく願います。

目次

原作前のウエルシュドラゴン

プロローグ

久々の戦闘です

不穏な気配

赤龍帝と黒龍妃

黒龍妃の禁手

復活の赤き龍帝

動き始める物語

改変されしディアボロス

始まりの日

変わった人々

1

5

11

20

28

34

42

49

55

原作前のウエルシユドラゴン プロローグ

俺、兵藤一誠は現在の状況に困惑していた。

なぜなら、今俺は過去にいるからだ。

過去と言っても2年ほど前、俺が駒王学園に入学したばかりの頃だ・・・。
さて、とりあえずどうしてこうなったのかと言うと、それは1時間ほど前に戻る。

リアスたちが駒王学園の高等部を卒業して2ヶ月程が過ぎ、アジアがオカ研の新学期という状況に慣れ始めたある日のことだった。

俺はいつもどおりオカ研の部室に向かう途中にアザゼル先生に会った。

「おお、イツセー丁度お前を探していたんだ」

「何か用ですか、アザゼル先生」

俺はこのときとてもいやな予感がしていた。

なぜなら、アザゼル先生がここ最近何か新しい実験をしているためグリゴリの研究施設に行っていると聞いていたからだ。

「どうしたイッサー、そんな警戒して」

「いや、グリゴリに行っている筈の先生がここにいるから驚いているだけですよ」

「なんだ、そんなことか。ま、それは置いてイッサーちよつと来い」

アザゼル先生はそう言うのと、俺の都合も聞かずに問答無用で先生の研究室に連れて行かれ、いつののカプセルの中に入れられた。

「先生、今回はなんですか」

「今回はクリフォトが開発していた異世界に行く為の技術を俺なりに研究して完成させてみた」

「ちよ、アンタはなにやってるんですか!!」

「だって異世界の技術を学べるチャンスだぞ。あいつみたいに悪用さえしなければ大丈夫だ。それにサーゼクスやミカエル、あその他の神話体系の連中にもすでに了承済だ」

「でも、何で行くのが俺なんですか。異世界の技術を学びたければ先生が行けばいいでしょ」

「おいおい、人がせつかく可愛い教え子に誰もおこなったことが無いとても貴重な体験を一番最初にさせてやろうと言っているんだぞ。もつと喜べよ」

「で、本音は何ですか・・・」

「もし、失敗して帰れなくなった場合、まずいからな」

「ちよつと待て！それじゃあ、俺が帰れない場合だつて」

「だから、もしそんなことがあった場合、何とかできるように俺が残るんじゃないか」
「だったら、安全が確認されてからでも・・・」

「あ、悪い。もう、転送スイッチ押しちまった」

「ふざけんなあああああ！」

「そうだ、最近忙しすぎてあまり活動できてなかったあの元墮天使総督のせいだ。」

「てか、異世界じゃなくてなんで過去なんだよ。」

「確実に失敗じゃないか。」

「それに2年前に戻った所で今からできることなんて・・・。」

「あれ、そう言えばさつきからドライグが一切反応を示していない。」

「俺は自分中に眠っている神セイクリッドギア・アプーステッド・ギア 器 赤龍帝の籠手に宿っている龍ドライグに話しかけた。」

「だが、ドライグに呼びかけても反応が無い。」

「あれ、ちよつとこれまじくくない。」

「今、俺の武器であるブーステッド・ギアが使えないし、アザゼル先生から連絡を受け取るための手段も無い。」

てか、俺って今悪魔なのか……。

イービルピースの気配もあまり感じないし少し、確かめてみるか。

結果から言うと、使えないのはブーステッド・ギアだけなのが分かった。悪魔の翼も出せし、自分の腕を龍化させることも出来た。

でも、一体何故急にブーステッド・ギアが使えなくなったのだろうか……。

「イツセー、早く起きなさい。学校でしょ」

「わかった。今行く」

俺は母さんにそう返事すると思考をやめ、今は学校に向かうことにした。

ああ、俺って本当に帰れるのだろうか……。

久々の戦闘です

どうも、兵藤一誠です。

過去の世界に来てから早くも2ヶ月が経ってしまいました。

そして、いまだにドライグは反応しないし、アザゼル先生からも連絡がありません。ただ、バランスブレイクは出来ないがブーステッド・ギアは使えるようになった。

そして、2ヶ月が経ち色々とわかったことがあるのでそれを纏めていきたいと思う。

まず、この世界は過去の世界だと思っていたが微妙に違うことがここ最近分かった。まず、クラスメイトに一人知らない女子がいたことだ。

名前は、黒霧くろぎり舞華まいか、特徴は黒髪くろかみのショートヘアで一人称がボクというとてもテンプレなボクっ娘だ。

そして、黒霧さんから悪魔の気配がするのはどういうことなのだろうか・・・。
リアスカソーナ会長の眷属なのか、それとも別なのかはまだ分からない。

話は変わるが、最近松田と元浜の二人に心配されるが多くなった。

原因は俺の性欲が少なくなったことが原因だ。

まあ、元の世界ではリアスと付き合いだしてから、アザゼル先生にも何回か指摘され

ていたのだが、彼女が出来るとあまり親しくない女子に欲情するのはなんだか申し訳なく感じてしまうからだ。

そんなこともあり、昔は変態トリオとして女子たちに嫌われていたが、ここでは松田と元浜の変態コンビと呼ばれている。

そして、俺はその二人に巻き込まれているかわいそうな奴になっている。

二人には少しだけ申し訳ない気がするが、自業自得だし

さて、そろそろ話を現在の状況に戻そう。

俺はブーステッド・ギアを使ったトレーニングを行うために深夜の廃工場に向かっていった。

なぜ、廃工場で行うのかというと、深夜でも公園などでは多くは無いが人がいることがたまにある。

そして、下手に公園で暴れたら近所の人に迷惑が掛かるからだ。

廃工場なら、暴れても付近に民家は無いから問題が無い。

さて、廃工場に到着しいつも通りトレーニングをはじめようとブーステッド・ギアを出現させた瞬間、工場の奥から誰かの気配を感じた。

俺は気配を感じたほうに視線を向けたが、そこには誰もいない。

「アスカロン！」

『Blade!』

俺はブーステッド・ギアからアスカロンを出し気配を感じた工場の奥まで移動した。しかし、姿は見えない。

気のせいかと思い、戻ろうとしたとき、天井から埃がおちてきた。

俺は気になり上を向くとそこには上半身が男だが下半身は蜘蛛の化け物が天井にいた。

「さっきからの気配の正体ははぐれ悪魔か」

俺が気づいたことに気がついたはぐれ悪魔は俺目掛けて巨体を下ろしてきた。

俺はその攻撃をかわすと、アスカロンの切先をはぐれ悪魔に向けた。

「今のを避けるとは貴様は人間ではないな。だが、腹におさめればいっしょか」

「食われてやるかよ」

『Boost!』

その音声が鳴ると同時に、俺の力が倍加された。

俺は倍加が消えないように、はぐれ悪魔から距離をとりながらはぐれ悪魔が放つくる蜘蛛の糸を丸めたような塊を回避しつつ、倍加を増やしていく。

そして、6回目の強化が終了し、はぐれ悪魔から少し距離をとった。

『Explosion!』

その音声と共に倍加が終了し、強化されたパワーが固定された。

次に、自分の中の駒をナイトにプロモーションし、その特性のスピードではぐれ悪魔の足を切裂いていく。

「クソ、貴様よくも俺の足を」

激怒したはぐれ悪魔は蜘蛛の糸以外にも、魔力の塊も同時に放つようになったが、足を切り裂かれたことにより身動きが取りづらくなっているため当たらない。

そして、俺ははぐれ悪魔の死角に移動すると、最近練習していた技を使うことにした。はじめにアスカロンに力を譲渡した。

『Transfer!』

次にアスカロンの刀身に聖なる力を纏わり付かせ、そのまま一歩踏み込んだ。

踏み込むのと同時に、アスカロンが纏っていた聖なるオーラがそのまま一筋の柱となりはぐれ悪魔を貫いた。

「ぐおおおおあああああ」

はぐれ悪魔は絶叫しながらその姿を消滅させた。

「ふう、何とかなったな。でも、まだこの技は使い勝手が悪いな。対悪魔用に先生やイリナが使っていた光の槍をモチーフにしたけど、威力もそこまで出ないし、時間が掛か

るし。やっぱりドラゴンショットのほうを練習したほうが良いかな」

と、眩きながら今回の戦闘での失敗したと思う所を反省し、いつものようにトレーニングを行い、朝日が昇る前に家に帰宅した。

一誠が帰宅した後の廃工場

「ねえ、さっきの子ってたしか、同じ学校の兵藤一誠君だよね」

『そうね。でも、あたしはそれよりもあの子が宿している神セイクリッドギア器の方に興味があるわ』

「あの、赤い籠手？あれって龍トワイ・スクリティカルの手の亜種じゃないの」

『いえ、あれは私と同じようにドラゴンが宿っているわ。しかも、あたしと白い奴と同じくらいの力を持ったドラゴンが』

「二天龍と同じ位の力」

『そう、あたし、黒龍妃こくりゅうきとライバルの白龍皇はくりゅうおうと同等の力』

「それは面白そうだね。早速学校で話しかけてみようかな・・・」

『なら、少し趣向を凝らしてみたらどうかしら』

「例えば？」

『そうね・・・』

「・・・それは、面白そうだね。楽しみだな、彼と戦うの・・・」

不穏な気配

どうも、兵藤一誠です。

はぐれ悪魔との戦いから一週間が過ぎ、特に変わったこともな・・・いや、これは変わったことと言えるのか・・・。

まあ、あの戦いの後、一人の女子から急によく話しかけられるようになった。

だが、なぜか喜べない。

向こうのほうは好意的に話しかけてくれているが、心のどこかで信用するなど言っていない。

どうしてこう思ったのかは分からないが、話しかけてきた女子、黒霧舞華くろぎりまいかの顔が一瞬だが俺のトラウマとなっているあの堕天使の顔に重なって見えるのだ。

本当に、どうしてなのか分からない。

と、何故このような話をしているのかと言うと、今朝、黒霧からこの週末にデートをしようと誘われたことが原因だからだ。

最初は断ろうかとしたが、松田と元浜、桐生の三人に邪魔されて断れず、行くことになったのだ。

そして、現在昼休み。

松田と元浜に一人で考えたいことがあると言つて、生徒が少ない中庭にの隅にいる。こんな時に、ドライグがいれば相談できたのだが、いまだにブーステッド・ギアからは何の反応も無い。

俺は自分の左腕を見つめて溜息を吐いた。

その時、急に頭痛を感じ、それとともに聞き覚えのある声が頭に響いた。

『イツ――聞――る――』

アザゼル先生の声だった。

『まだ……いしな・か・いいか・ツセーよ・けよ。そちら……に……がむかつて……けいかいしておけ。……しらべて……この……いない……だから……を……じゅんびを……じかんがかかる……』

最後のほうはノイズが走つたような音しかしなかつたが、その前の言葉を聞き取れる範囲だけで考えてみる。

「向かっていると警戒しておけか……」

つまり、何かやばい奴がこの世界に向かっているから警戒しておけつてことか……

これつて、かなりまずくないか。

今の俺はバランスブレイカーだ出来ない状態だ。

正直に言えば、もしこの状態で上級悪魔クラスの相手が出てきた場合今の俺では一人で対処することは難しいだろう。

相手が油断して俺に強化の時間を与えてくれないかぎり勝ち目はまず無い。

「でも、先生は何か対策を考えてくれてるんだよな。時間は掛かるが準備しているって言っていたし。それに今考えていても何も始まらないし、今は黒霧についてどうするかだ」

俺はそう呟くのと同時に予鈴が鳴った為、思考をそこでやめ教室に向かった。

アザゼルSIDE

一応、イツセーに現状伝えられるだけのことを伝えたが、どこまで伝わったが分からない。

俺は今の自分の無力さに舌打ちをしそうになったが、今はそれよりもこの部屋にいる自分の教え子たちに説明するのが先か。

「アザゼル、イツセーは大丈夫なの」

「ああ、今は大丈夫だが、これから先はまだ俺にも分からん」

「そんな・・・」

「すまん。だが、イツセーがあの世界に行かなければいけない理由があるんだ」

「でも……」

「すまない。だが、サーゼクスや、ミカエルと話し合って決まったことだ。それに、俺が必ずあいつが帰ってこれるようにしてやる」

俺がそう言うが、リアスや朱乃たちの表情は優れない。

俺はこいつらの不安を拭い去る為に笑いながら言った。

「それにあのイツセーだぞ。お前たちを残して死んだりするような奴じゃねえよ。それに、あいつのことを信頼しているのなら今はあいつが帰ってきた後のことを考えおけよ」

「そうね。イツセーならきつと大丈夫よ」

リアスたちの表情に少しだが活気が戻った。

「あと、一つ説明しなければいけないことがあるんだが良いか」

「なにかしら」

「今、この装置をまた使えるようにしているって話はしただろ」

「ええ、それがどうしたの」

「詳しい説明は省くがこの装置は神の残したシステムとも連動していて、システムの力を使ってイツセーを向こうの世界に飛ばしたんだ」

リアスたちの表情が驚愕に変わった。

「まあ、驚くのも無理ないが今はそれはどうだつていいんだ。それで、ミカエルたちセラフがシステムを使い調べてくれたんだが向こうの世界とこちらの世界は違う部分がある」

「どういふことなの?」

「つまりだ。こちらの世界にあつて向こうの世界に無いものがあるんだよ。例えば、イツセーの持つ赤龍フリーステッド・キョウ帝もその一つだ。そして、今この場にあるもので一つだけ向こうの世界では存在が確認されていないものがあるんだ」

「それってなんなの?」

「それは……だ。だからその所持者である……にも向こうの世界に行つてもらつてイツセーをサポートしてきてもらいたいんだが」

俺が、そう言うときいつは静かに頷いた。

イツセーSIDE

さて、今日は黒霧とのデートの日になりました。

結局、あのあと色々と考えましたが、不安は消えなかった。

でも、今からまた考えても仕方がない為、俺は約束の場所である公園に向かった。

俺が待ち合わせ場所に着いたの待ち合わせの時間より10分ほど前だった。

そして、そこから数分経ち黒霧が前から歩いてきた。

「ごめんね。誘ったのは僕なのに待たせちゃって」

「俺も今来たところだから」

と、前にも言ったような台詞を言った。

「なんか、とつてもテンプレな台詞だよね」

「そうだな」

「まあ、いいや。それじゃあ、行こうか」

こうして、俺と黒霧のデートが始まった。

最初に二人で話題だった恋愛映画を見て、昼食をファミレスでとり、午後からゲーセンに行き、プリクラやUFOキャッチャー、シューティングゲームなどをして過ごした。

そして、夕方、場所は最初の公園に戻る。

このシュチュエーションはデジャブを感じた。

「イツセー君。今日は付き合ってくれてありがとう」

「いや、別にかまわないよ。俺も楽しかったし」

「でね、言いたいことがあるんだ」

俺はいやな汗が背中から流れた。

あの時と状況が似すぎている。

「僕はね、悪魔なんだよ」

黒霧は背中から悪魔の蝙蝠に似た黒い羽を出した。

「君も悪魔だよ。先週、廃工場で君が戦っているのを見ていたときに、僕と同じ悪魔の気配を君から感じたんだ」

「それで、何のようなんだ」

「それでね、君に凄く興味が湧いたんだ。だから、今日の深夜、君がはぐれ悪魔を倒したあの廃工場で決闘しようよ」

「拒否権は」

「無いよ。拒否するなら学校にいる僕の知り合いの上級悪魔たちに君のことを教えるよ」

「.....」

「まあ、君が来ることを信じているよ。時間は深夜0時」

「分かった」

俺はどうしてレイナーレと黒霧が被っている様に感じたのかなんとなく分かった気がした。

なんとなくだが、騙されていることが分かっていたのだろう。

「一応、言っておくけど、決闘って言っても流石に命までは取らないよ。そして、僕が勝ったら君には僕の言うことを何でも一つだけきいてもらうよ。で、僕が負けたら君の言うことを何でも一つだけきいてあげる」

「・・・グレモリー先輩や生徒会長に伝えなくて良いのか」

「あ、知ってたんだ。別にいいんだよ。僕が勝手に君にアプローチしているだけだし」

「後悔するかもしれないぞ」

「後悔なんてしないよ。だって、君は悪い悪魔じゃなさそうだし。それに、先に僕が勝った時のお願いを言っておくと、君には僕の伴侶になってもらうから」

「そうか、伴侶になってもら・・・伴侶!？」

俺は急に伴侶と言われ思考が停止しかけた。

「あれ?どうしたの?」

「いや、伴侶ってなんだよ。だってお前、俺のことを騙して・・・」

「ああ、悪魔ってことを黙っていたことや、急にデートに誘ったりとか迷惑をかけた事は謝るよ。でも、デートに誘うときにも言ったけど君のことを気に入ったのは本当だよ。それに今日の一緒に過ごして、君は僕の理想のタイプだったし」

「いや、え、でも」

「まあ、最初は遊び半分な気持ちでデートに誘ったことは否定しないけど・・・」
黒霧は俺に抱きついてきた。

「僕は今日のデートで君のことが心の底から好きになったんだよ。だから、絶対に責任取らせるから覚悟してね」

俺はさつきから驚きの連続で、思考が追いついていなかった。

「それじゃあ、今日の夜を楽しみにしているね。イツセイ君」

黒霧はそう言うと、俺から離れ帰路についた。

俺の思考が、まともに働くようになったのは、黒霧が帰ってから数分した後だった。
えくと、一体俺はどうすれば良いのだろうか・・・。

赤龍帝と黒龍妃

深夜0時、俺は黒霧の指定された時間丁度に廃工場に着いた。

廃工場にはすでに黒霧がいた。

「約束どおりきてくれたね」

「ああ、逃げたって無駄だからな」

「分かってくれていていたなら良いよ。さあ、それじゃあはじめようか」

黒霧がそう言うと、黒霧の右腕に黒い龍の顔を象った小さな盾が出現した。

セイクリッドギア
「神 器か」

「セイクリッドギアチャージング・バックラー ぼくの神 器 黒龍妃の小盾をただの神器と一緒にしないでよ。この小盾は龍の力を

ロンギヌス
宿した神滅具の一つなんだよ」

俺はブーステッド・ギアをだし、構えた。

『Boost!』

強化が始まった。

「おお、あの時の龍の籠手《トウワイズ・クリティカル》の亜種の神器だね」

「一応聞いておくが、やめるって選択肢は無いのか」

「うん、ないよ」

即答だった。

「俺としてはあまり戦いたくないんだが」

「え、僕は凄く戦いたいよ。これも龍の力を持つ者の定めだと思って諦めてよ」

黒霧はそう言うと、魔力で巨大な火球を作った。

俺はその火球をいつでも回避できるように構えていたが、俺の予想は裏切られた。

黒霧は火球に向かって小盾を火球に近づけた。

『charge』

その音声と共に火球は小盾に吸収された。

「さて、僕の準備も整ったし始めようか」

俺は黒霧が言い切る前に、黒霧から距離をとった。

なぜなら、俺の立っていた場所にはすでに火球が放たれていからだ。

「流石に今の攻撃は分かりやすかったかな。じゃあ、あまり得意じゃない攻撃はやめて、

肉弾戦を行おうかな」

黒霧はそう言うと、俺の予想していたよりも速い速度で近づいてきた。

だが、目で追えない速さじゃない。

いつもバランスブレイカーの状態だが木場と訓練していたため速さには慣れている。

『Boost!』

8 回目の倍加を告げる音が鳴った。

だが、まだ彼女を倒すには足りないだろう。

俺は回避することに専念した。

舞華SIDE

彼、兵藤一誠と戦い始めてまだ3分ほどしか経過していない。

しかし、すでに僕の意識はあまり戦闘には向いていなかった。

なぜなら、彼はあまりにも弱いからだ。

(話が違うんだけど……)

(そうね……。まだ、彼はセイクリッドギアの中ドラゴンにいる龍と会ってないのかしら)

(ハア。面倒になってきたからもう終わらせようかな……)

(ちなみにまだ禁バランスプレイヤー手は調整中だからあまり長時間は使えないわよ)

(別に彼に使うつもりは無いよ。期待はずれだったし)

「ねえ、イツセー君。僕のこと馬鹿にしているのかな」

僕はイラつきを隠すことなく目の前で戦っている人物に問いかけた。

「それとも、女の子を殴る趣味は無いとか今更甘い事は言わないよね」

「さつきから言っているだろ、俺は戦いたくは無いつて」

「まだ、甘い事を言うんだね。わかったよ。それじゃあ、そんなことを言つてられなくてあげる」

『Takemagic』

その音声と共に目の前の最初に放った火球より大きく魔力の籠った火球が現れた。

「避けれるものなら、避けてみなよ」

火球は一誠に向かって最初にはなつた物の倍の速さで放たれた。

イツセーSIDE

『Boost!』

黒霧から火球が放たれるのと同じタイミングで20回目の倍加を告げる音声が届いた。

本当はもう少し倍加を溜めたかったのだが、これ以上は無理だと判断を下し、俺はこれ以上の倍加を止め、今の力で固定をすることにした。

『Explosion!』

俺の体に力がみなぎり、先程よりも威力も速さも倍に近い火球を危なげなくかわし

た・・・かのように思えたが、俺は火球が地面と接触した瞬間、火球に集まっていた魔力が爆ぜた。

そして、その衝撃は俺を襲った。

「ぐわあああ」

爆風に吹き飛ばされ、地面を3、4回ほど転がりながらも何とか体勢を立て直した。

黒霧は、俺が今の一撃を耐えたことに少しだけ驚いたような顔をした。

「あれ？今の凌げたんんだ」

「ああ、なんとかな」

「ふうん。少しは見直したよ。でも、これ以上君が僕と戦っても勝てる可能性は無いよ」

「それなら、もうこの戦いはやめないか」

「うーん、イラついてるから嫌だ」

「分かった。それじゃあ、そろそろ本気でいくぞ」

俺はそう言うのと、自分の中にある駒を女王に昇格させ、クイーンプロモーション自分に掛かっている倍加が解

けない内に覚悟を決め攻めにでた。

まず、一気に近づき殴りかかったが、あっさりと攻撃を読まれ小盾で防がれる。

だが、俺の目的は達成することが出来た。

「先に言っておくぞ。怪我したらごめん」

俺はそう言うと、ブーステッド・ギアに集めた魔力を倍化させ、その魔力を放った。
「ドラゴンショット」

『Darkcloth』

ドラゴンショットは黒霧を飲み込み、工場に大きな穴を開けた。

その時になって、俺はやりすぎたと思ったが、その気持ちは一瞬で消えた。

なぜなら、黒い霧のようなものを纏った、黒霧が目の前に現れたからだ。

「危なかった……。こんな強力な技を持つてるんだつたらもつと先に使えばよかったの
に」

「うるさい。そんな技、今の状態で簡単に使えるか」

『Burst』

俺に掛かっている倍加が解けた。

「ハア、これ以上は無理だ。俺の負けだ」

「え、せつかく面白くなってきたのに……。どうして、諦めるんだい」

「種を明かすと、俺のセイクリッドギアは10秒ごとに持ち主の力を倍にしていく能力なんだ。それで、さっきまで掛かっていた倍加が解けたからだよ。もう、どう足掻いても俺に勝ち目はねえよ」

「ふくん、10秒後とに倍加か。だから、最初攻撃できなかつたのか。でも、君のセイク

リッドギア凄いね。神滅具クラスの力はあるよ」

「まあ、少し変わったセイクリッドギアだからな」

「ま、とりあえず、勝負は保留でいいかな」

「ああいい……え。いや、勝ったのはお前だろ」

「だって、君は全力じゃなかっただろ。全力の君は今の比べ物にならないほど強いはずだよ。それに、僕も決着をつけるなら全力の君を倒したいしね」

「戦闘狂なんだな……」

「よく、言われるよ。さて、とりあえず後始末して帰ろうか」

「そうだな」

俺たちは壊れた工場を修復し、作業が終わりに近づいたときそれは現れた。

『舞華、何か来るわ』

黒霧のセイクリッドギアから女の声が聞こえたのと同時に、天井に魔法陣が浮かび上がった。

俺はその魔法陣に見覚えがあった。

ドラゴンゲート
龍門だ。

しかも色は、緑より濃い緑、深緑の龍門はあいつしかいない。

俺たちを幾度と無く苦しめてきた、邪龍グレンデル。

『何故、滅んだはずのグレンデルがここにいるの』

「クライ、どういうこと？」

『あの龍門からでようとしているのは大昔に滅んだ邪龍よ』

「なんで、そんなのが」

俺はこのとき、アザゼル先生からの連絡を思い出していた。

気をつけろって言っていたのはこいつのことか……。

龍門から一匹の龍がその姿を現した。

「……………」

『おかしい……』

「何が？」

『姿や気配はグレンデルのはずなのに、感情が無いと言えいいのかしら』

「聖杯で蘇らしたのか……」

「イツセー君、何か知ってるの？」

「ああ、だが今は説明よりも」

「そうだね。こいつを何とかしようか」

俺と黒霧はそれぞれのセイクリッドギアを構えた。

黒龍妃の禁手

最初に攻撃を行ったのは黒霧だった。

彼女は、火球を放った。

火球はグレンデルに直撃したが、特にダメージになってないようだ。

『Boost!』

俺が倍加を溜めている間に、黒霧は炎や雷、氷の魔力を次々と放ちながら紅蓮出るの注意を俺から離してくれている。

俺はその間に倍加が溜め、攻撃に移れるように準備する。

だが、俺は焦っていた。

本物のグレンデルではなく、そのコピー体でも、その鱗の防御力と奴の攻撃力の高さはよく知っている。

まるで、コカビエルの時と同じじゃないか……。

あの時も、今と同じよう倍加が溜まるまでは何も出来なかった。

「クソ、いい加減に反応してくれよ……、ドライグ……」

俺が今もまだ反応を示さない相棒に向かい言葉をかけるが、反応はしない。

「イツセー君危ない」

俺は視線をグレンデルに向けると、グレンデルは俺に向かってブレスを放とうとしているのが見えた。

慌てて横に飛び、一瞬遅れて俺の立っていた場所をブレスが通過していった。

俺はブーステッド・ギアを確認して倍加が解かれてないかことに安堵した。

だが、安心したのもつかの間、黒霧の攻撃を無視して、グレンデルが俺に向かって突進してきた。

俺は、すぐさま体勢を整え、その攻撃をやり過ぎす。

グレンデルが振り向きブレスを放とうとしたため、避けようとしたが、俺とグレンデルの間に黒霧が移動した。

「イツセー君。動かないでね」

黒霧はそう言うと、小盾を構えると同時に

『Darkclothes』

その音声と共に、俺と黒霧は黒い霧に包まれた。

「さて、あまり時間が無いから必要な事だけ聞かぬ。まず、あの龍について。弱点や何か知ってることは全部教えて。そして、君の神器の能力の二つ」

「わかった。まず、あの龍はお前の神器の中にいる龍が言っていた龍の劣化コピーだ。だが、それでも攻撃力と硬い鱗に守られているため防御力はかなり高い。そして弱点は龍殺しの力と聖なる力だな」
ドラゴンスレイヤー

「聖なる力となると、君の持っている聖剣がとどめになるかな」

「ああ、そうだな。しかも、俺の持つてる聖剣は龍殺しの力もあるから直撃できれば大ダメージにはなるな」

「そうか。まあ、あの鱗を何とかした後で君の聖剣には仕事してもらおうとして、次に君の神器が持つてる能力全部教えてもらおうよ」

「さっきの戦いでも使っていた10秒ごとに倍加する力と、その倍加した力を他人に譲渡する能力の二つが現状使える力だ」
バランスブレイク

「禁手は使えないのかい？」

「今は使えない」

「なら、君は倍加を溜めて止めの時に君に任せるよ」

「大丈夫なのか？」

「うん、制限時間付きだけど、一応、禁手は使えるし」

「とうか、お前の神器の能力は何なんだよ」

「まだ、少しだけ時間あるし、簡単に説明すると、魔力や光力、生命力を吸収して蓄える

能力と、それを引き出す能力。そして、その蓄えた力を別の力に変換する能力が主な能力だね。あと、この神器に宿っている龍がまだ神器に封印される前に使っていた闇を操る能力も含めれば4つだね」

「それで、奴に勝てる方法はあるのか」

「うん、五分五分くらいかな。でも、負ける気はないね。さて、そろそろ、闇の結界が消えかかっているから始めるよ」

「おう」

俺はそう力強く答えると、黒霧は笑みを浮かべた。

闇が消えると同時に、黒霧は小盾に話し掛けた。

「それじゃあ、クライ、お願いするよ」

『任せなさい。でも、10分が限度だから気をつけなさいね』

「うん。それじゃあいくよ」

『「バランスブレイク」』

黒霧の周りに闇が集まり彼女を覆っていく。

そして、彼女を覆っていた闇が晴れると、彼女の体を黒い龍の鱗でできたドレスのような衣装を身に纏っていた。

頭には変わった形をした、ティアラをつけ、胸には宝石のようなものがついたブローチをつけていた。

見た目は、完全に全身を黒い服装で纏めたお姫様のような服装だった。

「これが僕の禁手、黒龍妃の戦闘礼装。さあ、始めようか」

黒霧がそう言うのと、ドレスから闇を放出した。

グレンデルは黒霧に向かいブレスを放った。

『Charge』

その音声と共に、ブレスは闇に吸収された。

「無駄だよ。その程度のカリヤ。それじゃあ、今度はこちらから行くよ」

黒霧は、闇をグレンデルに向かい放った。

闇はグレンデルを覆うと、

『Charge』

「ぎやあああああああ」

グレンデルは悲鳴を上げている。

「いくら硬い鱗を持つていても実体を持った闇で万力のように締め上げて、さらに魔力を吸収されるのは堪えるようだね」

背筋に悪寒が走り、背中には大量の冷や汗をかいていた。

もし、今その闇に囚われているのがグレンデルでは無く俺だっただらと思うと．．．俺は、このままなら自分の出番も無いかもしれないと、少しだけ思っていたが、グレンデルは闇を振り払った。

「流石に、あつさりとはやられてくれないか。なら、こうしよう」

黒霧が手をかざすと、黒霧の周りに闇が集まりいくつもの剣に形を変えた。

グレンデルは攻撃を阻止しようと、突進するがそれよりも先に剣が完成し、放たれた。剣はグレンデルの鱗を貫通することは無かったが、それでも鱗に傷をつけていた。

『Boost!』

丁度その時、30回目の倍加が終了した。

俺はグレンデルに止めを刺すために、準備しようとしたその時。

再び、天井に深緑の龍ドラゴンゲート門が浮かび上がった。

復活の赤き龍帝

ドラゴンゲート

龍 門からは俺たちが対峙している龍と同じ龍がその姿を見せた。

グレンデルのコピー体だ。

「もう一体いるなんて聞いてないけど・・・」

新たに現れたグレンデルに視線を向けている黒霧に向かい、最初に出現したグレンデルがブレスを放とうとしているのが見えた。

「避ける」

黒霧は俺の声に反応し、体を反らしてブレスを回避した。

黒霧は闇で2体のグレンデルを牽制しながら、俺の近くまで降りてきた。

「まずいことになったね。まさか、2体目がくるとは思ってたよ」

「俺もだよ。でも、どうする。一体だけなら何とかなつたかもしれないが2体相手だとすると」

ジャガーノート・ドライブ
「覇 龍なら・・・」

「死ぬ気かよ」

「まあね。今の段階ではそれしか方法がないと思うよ。クライ、やるよ」

『待ちなさい、舞華。今の貴方が使えば本当に死ぬことになるわよ』

「それでも、この町を守ることは出来るよ。それに今の僕じゃ、命を代償にしたって3分くらいしか力使えないでしょ」

『本当にいいの・・・？』

「僕だつてせっかく好きな人が出来たばかりなのにまだ死にたくはないよ。でも、それ以外に方法は・・・」

「・・・一つだけ何とか出来る方法があるかもしれない」

俺は自分の中に浮かんだ一つのアイデアを二人に話すことにした。

「俺の中にいる龍とどうにかして目覚めさせることは出来ないか」

「クライ、そんなことできるかい」

『5分ほど時間が稼げれば、いけると思う』

「なら、すぐに頼む」

『あまり無茶をしないでね』

「黒霧時間は後どのくらいだ」

「3分ちよいかな」

「分かった。お前のバランスブレイカーが終わったら、今度は俺が時間をかせぐから、サポートを頼む」

「分かった」

黒霧はそう言うと、闇を2体のグレンデルに向かって放った。

闇はグレンデルたちを包み込み動きを封じた。

俺は生身では倍加は40回ほどが俺にとっては限度だ。

『Boost!』

そのため、これ以上は倍加されない。

それに、たとえば40回の倍加でもバランスブレイカーの状態に劣るのが不甲斐ない。

ドライグにも、カーディナル・クリムゾン・プロポジション真女王王になれるのに倍加が40程度しか上がらないの

はおかしいと言われていたんだがな……。

まあ、それも生身の訓練をあまりしている時間が無かったのだが……。

さて、そろそろ黒霧のバランスブレイカーが解除される時間だ。

俺はアスカロンを籠手から出現させた。

それと同時に、闇が黒霧を包み、黒いドレスや装飾品が無くなり、最初の姿に戻った。

俺はそれを確認すると、籠手の倍加を固定した。

『Explosion!』

それと同時に、黒霧の前に飛び出し、グレンデルに斬りかかった。

だが、斬撃は硬い鱗で阻まれる。

だが、ドラゴンスレイヤーと聖なる気のみまでは完全には防ぎきれなかったようで短い悲鳴を上げた。

「ギャアアア」

そして、一体のグレンデルが怯んでいる隙にもう一体のグレンデルにも斬撃を放ちグレンデルの気を黒霧からそらさせた。

俺は黒霧が後ろに下がるのを確認すると、グレンデルから一旦距離をとった。

グレンデルたちの意識は完全に俺だけに向けられた。

俺は、黒霧に意識が向けられないように派手に動き回りながら、グレンデルに攻撃を繰り返していく。

だが、硬い鱗に阻まれ思ったようにダメージは与えられない。

そして、今までブーステッド・ギアを扱ってきた感覚でもうすぐ倍加の効果ができることを感じ始めた。

俺は、アスカロンに今ある倍加の全てを譲渡した。

『Transferrer!』

そして、2体のグレンデルが丁度俺の射線軸上に重なるように誘導して、アスカロンの聖なる気を放った。

「ぎやあああああ」

2体の内の1体は聖なる気が直撃し消滅したが、もう1体のグレンデルは直撃したほうのグレンデルを盾にしたため、あまりダメージを受けてない。

『Burst』

俺の倍加も解け、万策尽きたと思ったその時、ブーステッド・ギアの宝玉から強い光発生した。

それと同時に、俺の視界が急に白くなった。

俺の視界が戻ると、そこには俺のよく知る赤い龍がいた。

「久しぶりだな、相棒。遅くなってすまなかった」

「まったくだぜ、ドライグ」

「お互い、色々と話したいことがあると思うが、今は奴を倒すぞ」

「ああ、いこうぜ、相棒。俺たち赤龍帝の力を見せ付けようぜ」

「おう」

そして、また俺の視界は白く染まり、視界が戻るとグレンデルが目の前でプレスを放とうとしていた。

俺はそれを避けずに、叫んだ。

「バランスブレイク!!」

『WellshDra^{ウエルシュ}gon^ゴBala^バnce^{ンス}Brea^ブake^{レイ}r^イ!!!』

この音声と共に、俺の体を赤いオーラが全身包み込んでいく。

そして、プレスが放たれたが、俺は駒をナイトに変えるのと同時に、鎧もまたその姿を変えた。

俺が起こした複数の奇跡、イリーガル・ムーブ・トリック赤龍帝の三叉成駒のウエルシュ・ニック一つ龍星の騎士に変わった。

『チェンChangeスStarターSonic!!』

余分な装甲を無くし、高機動戦に特化させているため、そのスピードを生かしプレスを避け、グレンデルの背後に回りこんだ。

そして俺は自分の中にある駒をルークに変化させた。

すると、鎧もまた姿を変え、先程は薄かった装甲が何倍も厚みを増し、攻撃力と防御力に特化した龍ウエルシュ・ドラゴン剛ニック・ルークの戦車になった。

「ドライブ、倍加してアスカロンに力を譲渡、そして透過の力で止めだ」
「わかった」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost!』

『Transfer!』

『Penetrate!』

倍加と力の譲渡、そして透過の力が発動したのを感じると同時に俺はグレンデルに向かって突っ込み、そのまま拳を叩き込んだ。

『ChangeSolidImpact!!!』

拳はグレンデルの腹部に当たった。

だが、その部分の鱗を破壊することは出来なかったが、透過の力で、数倍に高められたドラゴンスレイヤーと聖なる気が鱗を越えて、グレンデルに直接ダメージを与えた。

グレンデルから青い血が噴出した。

俺は、止めにもう一度拳を叩き込み、グレンデルを完全に消滅させた。

すると、再びドラゴンゲートが光り出した。

「チツ、まだ出てくるきかよ」

『それなら、ドラゴンゲートを破壊すればいい』

「ならあれだな」

俺はそう言うのと、駒をビシヨップに変えた。

鎧もまた、ウエルシュ・プラスター・ビシヨップ龍牙の僧侶に変わった。

『ChangeFangBlasT《ブラスト》!!!』

重装甲だった鎧が、元の厚さに戻り、代わりにバックパックとキャノンが形成された。

『BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!』

『Transfer!』

倍化されたオーラが砲口にチャージされていた。

ドラゴンゲートからすでにグレンデルのものと思われる下半身が現れ始めた。

「これで終わりだ。喰らえ、ドラゴンブラスタアアアア」

砲口から、赤いオーラの砲撃が放たれ、グレンデルごとドラゴンゲートを消滅させた。

こうして、10分以上掛かった戦闘は赤龍帝の復活と共に幕を閉じたのだった。

動き始める物語

グレンデルと乃戦闘が終わったあと、俺と黒霧は今日は解散して後日詳しい話をする
ことを約束しそれぞれ帰路に着いた。

寝ている両親を起こさないように家の中に入り、俺は自分の部屋に向かった。

部屋に入り、ベットに腰を掛けると、勝手にブーステッド・ギアが出現した。

『相棒、今まですまなかつたな。もっと早く出ていればグレンデルのコピー体などには
後れは取らなかつたのだが』

「いや、それでもお前のおかげで助かつたよ。本当ならお前の力を使わなくともバラ
ンスブレイカーになれば良かったんだがな。本当に弱い宿主でお前には迷惑かけるな」
『前に言つたはずだ。たしかに相棒は歴代でも最弱だ。だがな、俺や歴代の赤龍帝たち
はお前を最高の赤龍帝と認めている。だから、もっと自身を持って相棒』

「サンキュー、ドライグ。少しは自信がついたよ」

『さて、相棒。そろそろ今回のことについて相談しようじゃないか』

「ああ、そうだな」

俺は、ドライグに現状分かつたことを詳しく伝えた。

『なるほど、別世界か。だから、神器が動かなかったのか』

「どういふことだよ」

『前にも何度か説明したが、神器は神が作ったシステムの一部だ。だからこそ、他の世界では存在しない神器は能力が使えなくなる』

「でも、今は使えているぞ」

『そこが、俺にもよくわからない。まあ、あの墮天使なら何か分かるかも知れないがな』
『そうだな。まあ、アザゼル先生ならきつと何とかしてくれるか』

『では、次にこれからどうする気だ？相棒』

「どういふことだよ？」

『また、リアス・グレモリーたちに関わっていくのか。それとも、別の道を進んでいくのか』

「まだ決めてない。だけど、やっぱり、俺は……」

『その時になってから決めればいい。そのための赤龍帝だ。お前が望めば、俺はいつでも力を貸そう』

「サンキュー、ドライグ」

『だが、相棒。先程の戦いで思ったのだが、少し鈍ったのではないか』

「う……」

ドライグに言われたことは俺が一番感じていたことだ。

正直に言えば、俺がこの世界に来る前と比べると体が重く感じていた。

「そうなんだよな……。あまり、鈍らないように訓練はしていたが、やつぱり鎧を着た状態じゃないと、全力出せないし。それに、練習場所や練習相手もいなかったからな」

『なら、あの黒い龍の宿主に相談してみればいいじゃないか』

「一応、聞いてみるが、でも相手がいないじゃないか」

『それも、黒い龍の宿主にやってみればいい』

「うーん」

ドライグの提案を考えてみた……。

うん、黒霧なら喜んで引き受けそうだな。

あいつの戦闘狂の気質は俺のライバルのヴァーリになんとなくだが似ている感じがする。

てか、

「なあ、ドライグ。こつちの世界にもヴァーリやアルビオンはいるのか」

『さあ、それは分からん。俺と同じようにこの世界ではあいつはすでに滅んでいる龍かもしれないし、そうでないかもしれない。それに、宿主が違うなんてこともあるかもしれない』

「そうか・・・」

『だが、確実に言える事がある。それは、この世界には赤龍帝はいないということだ』

「・・・そうだな」

『だからこそ、知らしめてやればいい。俺たちの赤龍帝の存在を』

「ああ、そうだな」

???
S I D E

「結局、送ったグレンデルのコピー体は力が戻った赤龍帝にあっさりとやられちゃったわけ。結局駄目じゃない、あんたたちの作戦」

部下から渡された書類を見た女は同じ部屋にいた男女に声をかけた。

「仕方ないだろ。あの時はまだ力が戻ってないと思ってあの程度の戦力しか送ってなかったのだから」

と、男が答えると、男の隣にいた最初とは別の女が口を開いた。

「でも、先輩焦って、他の邪龍を送ろうとしたけど、龍ドラゴンゲート門もろとも破壊されたじゃないですか。これってかなりの失態ですよね」

「黙れ。次はうまくやる」

「フラグですか」

女が馬鹿にしたように言うと、男は空間を歪め、そこから一本の黒い剣を取り出し、女に向けた。

「あれ、やる気ですか。それなら、容赦しませんよ」

女もふざけた口調を止め、同じく空間を歪め槍を取り出し男に殺気を向けた。

「やめやめ、ここで争うなら、まずは私があんたたちを潰すけど」

書類を置いた女は、戦闘を始めようとしていた二人を睨みつけた。

二人は、女の殺気に怯みそれぞれ武器を片付けた。

「はい、よろしい。さて、それじゃあ、これからどうするかについて話そうじゃないか。まず、あんたたちはどうしたい？」

「俺は、この世界の物語を進めるために邪魔になる存在を排除したい」

「わたしは、別に無理に赤龍帝を排除しなくても、いいと思うんです」

「どういうことだ？」

「ちよつと興味があるわ。つづけなさい」

アザゼルSIDE

「ふー、ようやく準備は整ったか。あとは、ミカエルとサーゼクスに相談していつあいつを向こうに送るかだな」

俺はそう独り言を呟き、一息つくくと研究室の扉をノックする音が聞こえた。

「開いてるぞ」

入ってきたのは、リアスだった。

「どうした？」

「アザゼル、教えてほしいことがあるの」

「何をだ？」

「イツセーは向こうの世界で何をしなければならぬの？」

「なぜ、そんなことが知りたいんだ。お前がイツセーのところに行くわけじゃないんだぞ」

「わかってるわ。でも、あの子は私の大切な人なの」

「ハア、しかたない。だが、これは誰にも言うなよ」

俺は真剣な表情で言った。

「わかった」

リアスはうなずいた。

「この始まりは、クリフォトが使っていた技術が、神の残したシステムでまだ判明していなかった箇所を利用できるのがわかった時だった。その時、ミカエルに頼まれて、俺とグリゴリの幹部たちとセラフのメンバーでシステムの研究を行ったんだ。その時に、あるものが見つかったんだよ」

「あるもの？」

「ああ、聖書の神が残した、面倒な遺言がな．．．」

改変されしディアボロス 始まりの日

どうも、兵藤一誠です。

時が過ぎるのは早いもので、高校二年になりました。

俺がリアスと出会い、悪魔になる。

俺にとっては全てのはじまりであり、今日はあの堕天使に出会う日でもあるのだ。

正直に言えば、今でもあの堕天使、レイナーレは俺にとってはトラウマなのだ。

『大丈夫か、相棒』

心配したドライブが俺に声をかけてきた。

「ああ、なんとかな」

『最初に言っておくぞ、相棒。今の相棒はあの時とは違い、俺や黒い龍の宿主も傍にいる。それに、ここにいないとも相棒のことを想ってくれている人たちがいるだろう』

「そうだな」

俺は、向こうの世界にいる仲間たち、そして俺の最愛の人の顔を思い浮かべた。

そして、この世界でできた新しい仲間である黒霧の顔も。

「一誠、黒霧ちゃんが来たわよ」

下の階で、母さんの声が聞こえた。

「今、行くよ」

俺はそう答えると、鞆を持って一階に下り、玄関で待っている黒霧の元に向かった。

少しだけ、

グレンデルとの戦闘の翌日、俺は黒霧に大体の事情を説明した。

まあ、黒霧の最初の反応は半信半疑だったが黒霧の中にいる龍やドライグも説明に加わり、時間掛かったが理解してもらいその後についての話し合った。

結果としては、俺は黒霧の仮眷属ということになった。

ちなみに、役割は女王クイーンだそうだ。

そして、驚いたことに黒霧の父親は四大魔王様の一人、アジュカ・ベルゼブブ様の眷属だった。

そのため、事情を説明して俺の駒に細工をしてくれたそうだ。

しかも、俺の話を聞きつけたアジュカ様にも協力をしていただいたらしい。

え、なんで他人事なのかって？

あの時の、俺の記憶が曖昧と言えれば良いのか、無かったといえれば良いのか、思い出し

たくなひと言えは良ひのか・・・。

まあ、あの時のことはそのうち語ることにしようと思う。

いつものように、俺は黒霧と一緒に通学路を歩いてた。

「それにしても、こうやって一緒に学校に行くようになって大分経つよな」

「そうだね。でも、そろそろリアスたちに気づかれ始めてきたから、近いうちに下僕をよこしてくると思うよ」

「わかった」

「あと、パパからの伝言」

「なんだ」

「一応、手紙を預かってきたから読んでね」

黒霧から茶封筒渡された。

封を切り中を確認すると、2枚の手紙が入っていた。

まず、一枚目を確認した。

内容は、駒の偽装に何か不具合は生じてないかと、バランスブレイカーの時に使う駒の力に問題が起こっていないかといった内容だった。

1枚目を読み終わり、2枚目を読みはじめ・・・。

「ゲホッ、ゲホ」

途中まで読んで思わず嘔出してしまった。

「どうしたの」

黒霧が急に咳き込んだ俺に心配そうに声をかけてきた。

「いい、いや別に何でも」

だが、ここで慌てて手紙を隠そうとしたのがミスだった。

黒霧は俺が隠そうとした手紙を素早く奪い取った。

黒霧は俺から奪った手紙を読み顔を赤面させた。

手紙にはこう書いてあった。

『あ、あと、今回一番気になっていたことなのですが、一誠君。私の娘との子供は一体いつごろになるでしょうか。私と妻はとても楽しみにしています。悪魔の出生率はとて低いことは一誠君も知つてのとおりです。そのため、舞華にも早いうちに許婚を紹介できればよかったです。私の家系は名が有名なところでありません。だからこそ、舞華が悪魔の彼氏を連れてきたときは妻と一緒にとても喜んだものです。もし、学生のとときに舞華が妊娠した場合でも・・・』

と、ここまでしか読んでいない。

黒霧も途中まで読んで、手紙を握りつぶし叫んだ。

「パパの馬鹿!!!」

さて、時間は放課後になった。

あのあとは、あの手紙のせいで気まずい空気になり、会話も無く登校した。

その後は、松田や元浜と会話して、いつもどおりだった。

そして、俺は今呼び出された黒霧が帰ってくるのを教室で待っていた。

そのとき、俺のスマホフォに黒霧からメールがきた。

『ごめん。ちよつと用事を頼まれたから遅くなりそう。先に帰ってて。埋め合せは考えておくから』

松田と元浜の二人はすでに帰宅しているため、一人で校門を出ると、一人の少女が現れた。

その少女のことは俺はよく知っていた。

なぜなら、向こうの世界でもあったことのある少女だったからだ。

天野夕麻と言う名を名乗り、俺を騙し、殺した少女。

墮天使レイナーレだ。

「あ、あの兵藤一誠くん、ですよね」

「ああ、そうだよ」

「あ、あの、一目見たときからかっこいいいなと思っていました。よかつたら私と付き合ってください・・・いたあ」

・・・どうやら舌を噛んで悶絶しているようだ。

あれ、あの時の告白ってこんな感じだったっけ？

変わった人々

さて、あの告白の後、黒霧が丁度その場を見ていたらしく、ただいま修羅場になっています。

「さて、どういうことかな。イツセー」

黒霧は腕を組みながら俺を睨みつけている。

「えくと、告白されました」

「なるほど。で、あなたは何でイツセーに告白したのかな」

「えくと、前に一度見かけて、そのそれで、一目惚れしたんです」

「そうなんだ。墮天使が一目惚れね」

黒霧がそう言うのと、夕麻はとても驚いたような顔をした。

「なんで、そのこと」

「だって、僕は上級悪魔だからね」

「え、上級、嘘でしょ。だって、この学園にいる上級悪魔は二人しかいないって聞いたのに」

聞いた事実がかなりショックだったのか挙動があやしくなった。

「え、じゃあ、一誠君も悪魔なの？」

夕麻は驚いたような顔で俺を見た。

「ああ、そうだけど」

「そんな・・・」

夕麻は泣き崩れた。

流石に、路上に泣き崩れた女子をほっとくわけにはいかない為、俺たちはファミレスに移動して事情を聞いた。

話の内容は、とても不憫すぎるものだった。

「ヒック、アザゼル総督からは趣味の道具をいつも買いに行かせさせられるし、姉からは虐められるし、他の幹部のみなさんからも終わらなかつた書類の山を任せられるし、初恋の人は悪魔だし・・・」

この後も愚痴は約20分ほど続いた。

「・・・その、なんかごめん」

「えくと、苦労してきたんだな」

「ありがとう。そうやって心配してもらつたはじめてだから」

「あ、そうだ、ねえ、君、悪魔にならない？」

「いいです・・・て、え〜〜」

夕麻は驚いて、大声を出した。

「ちよつと、他のお客さんもいるから五月蠅いよ」

「あ、ごめんなさい、じゃなくてなんで、墮天使を普通にスカウトしてるんですか」

「え、悪そうな人じゃないし、悪魔になればそんな理不尽なめにも遭わないよ」

黒霧は言葉巧みに夕麻を悪魔にしようと誘惑するが、夕麻は根が真面目なため頷かない。
い。

「うくん。なら、この条件ならどうか」

黒霧はそう言うと、俺の方に手を向けながら言った。

「悪魔になればイツセーとも一緒に過ごせるし、もしかしたら・・・」

黒霧は席を移動して、夕麻に耳打ちをした。

夕麻は顔を赤くさせて、黒霧に耳打ちをした。

俺は二人が何を話しているのか気になったが、聞かないほうが身のためだろう。

それから、五分ほど二人は会話を続け、その感の間俺はドライグと心の中で会話していた。

「よし、話は決まったね」

「はい、これからよろしくお願いします」

「それじゃあ、場所を変えて転生を始めるね。レイナーレ」

「わかりました」

「お、決まったのか」

「まあね。さて、これから僕とレイナーレは場所を変えて転生の準備をするけどドイツは来るかい？」

「用事を思い出したからやめとくわ」

俺はそう言うのと席から立ち上がった。

自分の分の勘定を済ませて、店から出た。

俺は黒霧たちと別れた後、俺は一人で教会に向かっていた。

なぜ、急に教会に向かったのかというそれは、さっきのファミレスでドライグとあることについて話したのが原因だ。

「なあ、ドライグ。この状況どう思う」

「どういうことだ。相棒」

「いや、気になったんだが、世界が変わるだけでここまで性格って変わるのか？」

「なんとも言えないな。だが、一つ言える事ならある」

「なんだよ」

「この世界は俺たちのいた世界じゃない。だからこそ、何が起こるか分からないってこ

とだな」

「じゃあ、俺たちの知識は役に立たないのか」

「だが、何があっても俺たち赤龍帝ならなんとかなるさ。それに気に食わなければ変えれば良い」

「昔の相棒はまだ、その力が無かったが、今の相棒ならどうとでも変えられるさ」

「ああ、そうだな。じゃあ、手始めに教会に行ってみようか」

こうして、はじめに教会に行きアーシアの運命を変えてみようと思ったのだ。

だが、そう簡単にはいかなかった。

なぜなら、俺の目の前に同じ駒王学園の生徒とアーシアが歩いているのが見えたからだ。

その生徒には見覚えがあり、名前は工藤くどうきょう恭だっただと思う。

見た目は、背が高く、銀髪ぎんぱつのショートヘアーでかなりの美形だ。

そして、見た目はどう見ても男なのだが黒霧の話では女らしい。

今でも半分信用していないが、ギャスパーのような例もあるため認めてはいた。

そいつとアーシアが教会に向かって歩いてるのが遠めだが見えたのだ。

俺は教会に行くのをあきらめてきた道を引き返そうとした。

「あの、すみません。そこのお兄さん」

俺は振り向くと、そこには見知った顔がいた。

フリード・セルゼン。

何度も俺たちの前に現れ、俺たちの邪魔をしてきた狂ったはぐれ神父。

そいつが今、俺の目の前にいる。

「俺のことか」

俺はなるべく顔が引きつらないように、しながら答えた。

「ええ、そうですよ。その悪魔のお兄さん」

フリードはそう言うと、急に俺に頭を下げてきた。

「お願いします。助けてください」

俺は急に頭を下げられたことや、フリードの性格の違いに驚き、言葉を失った。